

ブルーシートパライダイス

◎登場人物

大輔(ダイスケ)

一平(イツペイ)

香織(カオリ)

義樹(ヨシキ)

花(ハナ)

小林(コバヤシ)

山岡(ヤマオカ)

千葉(チバ)

泉(イズミ)

1 「その瞬間から彼女の世界は広がったんだ」

舞台はブルーシートの抽象空間。

舞台の背面もブルーシートで覆われている。

大輔、一平、花、香織、義樹は高校の同級生である。

高校1年の春。

舞台の真ん中で膝を抱えうずくまる花。

そこに一平が現れる。

一平 ……なあ。

花 はい？

一平 お前、同じクラスだよね？

花 ……うん。

一平 部活入ってないの？

花 ……うん。

一平 帰らないの？

花 ちよつと、帰りたくなくて。

一平 家に？

花 うん。

一平 ……なんで？

花 ……。

一平 放課後、なんかすることあんの？

花 ……ない。

一平 だったらさ、お前サッカー部のマネージャーやりなよ。

花 え？

一平 どうせすることないんだろ？ 一度きりの高校生活、なんか部活やった方が楽しいぜ。まあうちそんなサッカー強くないけど。

手を差し伸べる一平。

手を差し出す花。

そこに大輔が現れる。

大輔 なーにナンパしてんだよ一平。

一平 ナンパじゃねーよ。マネージャーの勧誘だ。

大輔 マジで？ マネージャーは多い方がいいもんな！ ありがとう！

花 あ、うん。

大輔 俺は大輔！ よろしくね！

握手を求める大輔。応じる花。

花を中心に3人手をつなぎ、客席の方を向く。

大輔・一平・花 その瞬間から俺たち(私たち)は青く染まり出したんだ！

暗転。

2 「大人は夢を過去に置いてくる」

市役所にて。

スーツ姿の千葉と泉。PCで作業をしている。

泉 あつついー。千葉さんクーラーの温度下げてください。

千葉 だめだ我慢しろ。役所が率先して省エネしなきゃな。

泉 公務員になんてなるんじゃないかったです。

千葉 何言ってるんだか。

泉 だってこれじゃ何のために公務員になったかわかんないですよ！ 何で

私は残業してるんですか！

千葉 泉、お前な。公務員に夢見すぎ。

泉 ちくしょー！ 学校の先生みたいに夏はずっと休めると思ってたのに！

千葉 学校の先生だって、ずっと休んでるわけじゃないだろ。

泉 大体ですわ、なんですか今のこの仕事は！ 働きもせず、家も持たずに、

土地を不法占拠するような奴らのせいで、私たちはこうして働かされてるわけですよ。理不尽じゃないですか！

千葉 ホームレスの方にも色々事情があるのは、身をもって知ってるだろ？ 泉 わかってますよ。わかってますけど、いい人もいるのもわかってますけど。

でも暑すぎて愚痴りでもしなきゃ、やっってらんないですよ。

千葉 まあな。

泉 働け！ 働け！ 社会に貢献しろー！

千葉 うるさいぞ。

泉 わー働きたくないー！

千葉 どうしてこんな奴をうちは採用したんだか。

泉 顔採用ですかね。

千葉 んなもんあつてたまるかよ。

泉 あー働きたくない。いー働きたくない。うー働きたくない。えー働きたくない。おー働きたくない。かー。

千葉 (遮って)うるせえ！

泉 はーい。

沈黙。キーボードを叩く音のみが聞こえる。

泉 ……千葉さんはどうして働いてるんですか？

千葉 生活のためだ。

泉 自分の生活のためにホームレスを働かそうとしてるんですか。

千葉 ……そうだ。

泉 いいんですかそんな人生で。

千葉 お前も同じだろーが。

泉 同じだから聞いたんですよ。

千葉 お前、なんかやりたいものとかなかったのか。

泉 ……特に。なりたいたいものとか、見つからないですよねー。大学時代に自分探しの旅とかしてみましたけど、結局ただ、旅行を楽しんだだけっていう……。

千葉 旅に出て自分が見つかる奴の方がどうかしてると思うけどな。

泉 まー。そーですけど。

千葉 結局な、今の仕事をいかに楽しんでできるかってことなんだよ。

泉 千葉さんはなかったんですか？ なりたかったもの。

千葉 俺はね、……なかった。幸せだよなー。なりたいたいものがある奴って。

泉 どうですかね。なりたいたいものになれるやつなんてほんの一握りですよ。

大抵が、なりたかったやつかなれなかったやつになるんですから。諦める方がつらいんじゃないですかねー。

千葉 まあでも、なりたかった事実はその人の人生に何かしら影響を与える

だろうし、そういう過去も大事なんじゃないか。

泉 まあずっと諦めないでバンドやってるやつとかいますけど。

千葉 夢が叶えばいいが、叶わなければいつか諦める時が来る。過去にしないでいい時が来るんだよ。

泉 随分知った風じゃないですか。さては、ありましたね？ なりたかったもの！ さっきなかったって言ったの嘘でしょー！

千葉 ……まあ俺はなれなかったやつだから。さっ！ 出るぞ！ （鞆にP Cをしまう。）

泉 あーはぐらかしましたねー！

千葉 資料忘れんなよ！

泉 はーい。

千葉、泉、去る。

3「その日、彼女はいなかった」

明転。

大学の文化祭の夜。

ブルーシートで囲われた小屋で酒を浴びる学生たちの騒がしい声が聞こえる。

大輔 うげえええええええ

舞台隅で吐く大輔。背中をさする義樹。

缶チューハイを片手に見守る一平。

義樹 飲み過ぎだつて大ちゃん！

大輔 悪い。

一平 人生最後の文化祭の夜に何やってんだか。

ひとしきり吐く大輔。口をぬぐい、水を飲む。

大輔 ふーっ。吐いたら少し落ち着いたよ。

義樹 ちょっと横になれば？

一平 寝グロすんなよ。

大輔 しねーよ！

横になる大輔。

大輔 はー。何やってんだろーな俺。

義樹 まあこんだけ馬鹿騒ぎでみんなのも今だけだからさー。

一平 そーだな。あー。社会人になりたくねえなあ！

大輔 だなー。なりたくねえなー！

義樹 いいじゃん2人は。公務員だし。安定じゃん！俺なんか、3年は奴

隷と噂の映像制作だぜ？

大輔 安定……ねえ。逃げただけだよ。義樹みたいにやりたい道を選べなかっただけ。

一平 大輔お前やりたいことなんてあったの？

大輔 あったよ。

義樹 え？ 何何？ 何になりたかったの？

大輔 ……笑うなよ？

義樹 笑わない笑わない！ な！ 一平！

一平 ……多分。

大輔 多分？

一平 だってそんな前振りされたら、ねえ。

大輔 まあ、いいや。やめた。言わない。

義樹 えー！ 言わないのかよ！

大輔 だってさ、虚しくなるだけじゃん。なりたいたものをいうならまだしもなりたかったものなんて……。不毛だよ。

一平 卑屈になんって。

大輔 お前だって役所勤めなんだからわかるだろ？ 俺の気持ち。

一平 わかるっちゃわかるけどさ。あ！わかった！ サッカー選手だろ？

義樹 それは一平じゃん。

大輔 俺はお前ほどの才能はないからそんなこと思いもしないよ。

一平 そっか。そうだよな。お前、俺ほど才能なかったもんな。

大輔 謙遜しろよ！

義樹 一平もあの時の故障が無ければな……。

一平 まあね。でもさすがに4年前のことだし、もう忘れたよ。

大輔 忘れた……か。

一平 ああ。

大輔 嘘つけ。

一平 あ？

大輔 最後の試合……。あの日俺がお前の代わりに試合に出なけりや……。

お前だったら、あのシュートは外さなかった！

義樹 大ちゃん、まだそのこと気にしてんのか。

一平 その話は高校時代散々しただろ。もういいんだって。

大輔 だって！

一平 俺はお前に託したんだ。お前を信じて。だから結果はしょうがねえ。

大輔 だけだよ！

一平 お前がそんな感じじゃ困るぜ。もっと胸張っててくれよ。いい試合だった。

大輔 俺は、俺はどこかで諦めちまってたんだ！ お前が出れないって聞いて、それで……。

一平 もういいって。

義樹 はいっストロップ！ すごいよね！ 4年前のことでこんな熱くなれるなんて。それだけ真剣に生きてたってことだよな。

一平 ……そうだな。

大輔 うん。

一平 学生時代だけかもな。そんなに熱くなれるのなんて。

義樹 あーあー。ずっと学生でいられたらいーのになあ。

大輔 ホントに。

そこへ香織が水を持って現れる。

香織 お水持ってきたよー。

大輔 おせーよ香織。お前が遅いから義樹が自販で買ってきてくれたよ。

香織 せっかく持ってきてあげたのになにその態度。

香織、ペットボトルを大輔のお腹に落とす。

ギリギリ、キャッチする大輔。

大輔 わっ！ バカッ！ 死ぬって！

一平 それはえげつない。

香織 感謝の心も持てない奴は死ね！

義樹 まあまあ。ありがとね、香織。

香織 よく吐くまで飲めるよね。信じられないわ。そんなに大人になれるの？

大輔 別に大人だって吐くだろ。第一、二十歳超えてるからもう大人です！

香織 小学生の頃から全く進歩ないけどね。

大輔 いや、それはないだろ。変わったただろ俺。

一平 ちなみに中学高校と今は大して変わってないな。

義樹 ちなみに高校から大学も変わってないよ。

大輔 なんだお前らは！ 敵か！ 俺の敵なのか！

一平 お前には秘密にしていたんだが……。実は俺たち全員お前の敵なんだ。

大輔 まじかよ！ 今知ったよ！

義樹 世界中が大ちゃんの敵だ！

大輔 そんな世界なら俺、殺されてるわ！

香織 ……でもこのメンバーで集まるのも超久しぶりだよー。

義樹 うん。一平と香織が来てくれてよかったよ。

一平 でもいーのか？ お前らのサークルの酒勝手に飲んで。

大輔 飲みながら言うなよ。

義樹 いーんだよ。人多すぎて誰がサークルのメンバーなんだかわかんないし。

大輔 みんな酔ってるしな。

香織 明日になったら私と一平の存在は忘れ去られてるわけね。

一平 とてもフットサルをやってる連中には見えないわ。

大輔 フットサルすんのは月1であとは基本飲みだからね。

一平 堕落してんなあ。

大輔 大学生は堕落するもんなの！

義樹 ……あ、そーだ。香織は将来何になりたかったの？

大輔 お、そうそう、印刷会社の事務職になりたかったわけじゃないでしょ？

香織 は？ 何急に？

一平 丁度そんな話をしてたんだよ。ほら、俺たち来年から就きたくもない職に就くわけじゃん？ だから本来なら何になりましたかった？ って話。

香織 うわー何そのネガティブな会話。

大輔 いいじゃん。ノリだよノリ。教えてよ。

義樹 大ちゃん答えてないけどね。

大輔 いーの！ 今は香織の番なの！

香織 そのなりた「かった」って過去形はよくないね。

一平 だってしょうがないじゃん。

香織 別に夢を追いかけるのは子供の特権ってわけじゃないんだから！
在進行形で夢を追ったっていいじゃん！

義樹 香織はポジティブだねー。

大輔 じゃあ香織様は何になり「たい」んですかー？

香織 聞き方がウザい。

一平 もったいぶらずに言えよ。

香織 ……私は、女優になりたいの！ 文句ありますか？ 女優になりたいから定時で帰れる事務職に就いて劇団に入るの。悪いですか？

3人 悪くないです！

義樹 そんな怒らないですよ。

香織 怒ってはない。夢諦めて大人になった気でいるあんた達にムカついただけ！

一平 いやそれ怒ってんじゃーん。

大輔 ……なりた「かった」をなり「たい」にするかー。そうだよなー。…
…あいつがいたら今の俺たち見てなんていうかな。

気まずい沈黙。

一平 何だよそれ。

義樹 ……。

大輔 ほら、俺たちってさあ、いつもあいつに引っ張ってもらってた感じあるじゃん？ あいつが「いくぞー」つつって。俺らがついてく感じ？ 花火もピクニックも大体あいつが発案者だったもんな。

一平 ……ああ、そうだったな。

義樹 もう、会えないのかな。

一平 どうだろうな。
香織 今どこにいるのかな……。生きてるのかな……。
全員 花！

暗転。

4 「花火は、刹那だから美しい」

河川敷。

ホームレスの憩いの場。

小林 うげえええええええ

舞台隅で吐く小林。背中をさする山岡。

山岡 まだ夜になってないってのに飲みすぎなんだよ。
小林 すまん。
山岡 そんなんじや今晚の花火見逃しちゃうぞ。
小林 それは困る。回復しなきゃな。
山岡 ほら、水飲みな。

山岡、ペットボトルの水を渡す。

小林、水を受け取る。水を飲み。

吐き終わり、移動する。

小林 悪いな、ヤマさん。

山岡 ったく。コバさん酒飲むといつもこれだ。勘弁してほしいよ。

小林 だから悪いって。花火となるとどうしてもテンションあがっちゃまってな。

山岡 まあ年に一度のお祭りだからな。

小林 花火はいいよなあ。永遠に見てたいなあ。

山岡 何言ってるんだか。花火っちゅうのは刹那だからいいんじゃないやねえか。
一瞬綺麗な花を咲かせて散ってしまう。その切なさが美しいんだよ。

小林 でもなあ、綺麗なもんは一生残したいじゃないか。

山岡 ……だからコバさんは絵え描いてんのか？

小林 それも、あるのかもなー。

山岡 俺あ好きだよ。あんたの描く絵。

小林 そりゃありがたいね。

山岡 コバさんの描く絵には「切なさ」があるからなあ。

小林 俺たちはまあ人それぞれ理由はあるだろうが、何かを失ってここにいるわけだから。そーゆーのがにじみ出るのかねえ。

山岡 なーにそれっぽいこと言ってるんだよ！ さあ飲み直すぞ。

山岡、一升瓶とコップを出す。

小林 おいおいまだ飲めねえよ。また吐いちまう。

山岡 ったく。しょーがねーなー。じゃあ俺だけ飲むかー。

山岡、酒を注ぎ飲むようにする。

千葉 すいませーん。

泉 ごめんくださーい。

スーツ姿の千葉と泉が現れる。

泉は鼻をつまんでいる。

小林 またあんたらか。

山岡 おお！ 泉ちゃん！

泉 ヤマさん！ なんかこの間きた時よりさらに臭いんですけど。

千葉 おいつ！ 泉！ 失礼だぞ。この人たちは元々マックス臭いんだ。これ以上臭くなれるわけないだろう！

泉 すいません。

小林 いや、お前も失礼だろ！

千葉 臭いは慣れだ！ そのつまんだ手を退けろ！

泉 いや、だって……。

千葉、泉の手を引き剥がそうとする。抵抗する泉。
最終的に泉の手は引き剥がされる。

泉 うっげー！ー！ くっさあああ！

山岡 さっきコバさんがゲロったからな。いつもより臭くて当然だ。
小林 すまん。

千葉 本当にいつもより臭かったんですね。

泉 うううううううう。死ぬー！ー！ー！。

山岡 大げさな。泉ちゃんも飲むかい？ 飲んだらアルコール消毒で臭くなくなるかも。

山岡、グラスに酒を注ぎ泉に渡そうとする。

泉 そんなわけないじゃないですかー。

と言いつつ受け取ろうとする泉。

千葉 おいつ！ 職務中だぞ。

泉 藁にもすぎる思いです。

泉、酒を受け取り、飲み干す。

千葉 お前なー！

泉 ……あ、あれ？ なおった！ 臭くない！ 臭くないです！
小林 そんなバカな。

山岡 ほらな。言った通りだろ？

泉 アルコール消毒成功ですよ！

千葉 ちょ、ちよつと待て！

山岡 なんだ？

千葉 私も飲んであげてもいいですよ。

笑う山岡。泉のグラスを受け取り酒を注いで千葉に渡す。

山岡　しょーがねーな千葉ちゃんも。ほらっ。
千葉　ありがとうございます。

千葉、酒を受け取り、飲み干す。

泉　どうですか？

千葉　ちよつと待て。

千葉、臭いを嗅ぐ動作をしたのち、咳き込む。

千葉　くっさ！

山岡　個人差だな。

泉　あら、千葉さんには効きませんでしたか。

小林　……わーわーうるせえな。何しにきやがった！

泉　まあまあそう怒らずに。

山岡　コバさんは相変わらずこの2人に厳しいな。

千葉　まあ、用件はいつも通りなのですが……。

千葉、鞆からホームレスへの行政の支援策のパンフレットを出す。

千葉　あなた方お2人は、まだ十分働けます。もう一度考え直してみませんか？　市の就労支援をぜひ受けていただきたい。

小林　こんなおめでたい日に来るなんてあんたらも野暮だね。

泉　ご存知かとは思いますが、強制撤去の日が近いんです。私どもとしては、なるべく穏便に自主撤去していただきたいんです。

小林　強制撤去なんか糞食らえだ！　俺たちは絶対にここを動かない！

千葉　そうは申されませんが……。

山岡　なあ泉ちゃん。

泉　はい！

山岡　……その支援策っての、詳しく聞かせてもらってもいいか。

小林　ヤマさん！

山岡　コバさん、俺はな、この2人なら信じられるんじゃないかねえかって。そう思うんだよ。

小林 こいつらを信じたらダメなんだよ！

山岡 だがよ、強制撤去には逆らえねえじゃねえか。だったら。

小林 強制撤去なんかさせねえって！

山岡 俺はよお、元々建築現場のトビ職だったんだ。だけどある現場で怪我して働けなくなっちまった。そうすつとこの年だろ？ 他の現場仕事を探してはしたが、どこも不景気で雇ってくれなくてよ……。

小林 ……。

山岡 なあ、泉ちゃん。こんな俺でもなんとかなるってんだろ？

泉 もちろんです！ やる気さえあればどうとでもなります！

千葉 そのための支援策ですから。

小林 ちっ。

小林、その場から立ち去ろうとする。

小林 悪いなヤマさん、今日の花火は一人で見るよ…。

山岡 ……そうか。切ねえなあ。……また明日な。

小林 ああ。

暗転。

5「その刹那、彼女は美しかった」

高校時代。

花火大会会場。

場所取りに現れた花と大輔。

花、駆け出してブルーシートを広げる。

花 こことつたー！

大輔 お、よさそうだね。

花 ここなら花火、めっちゃ近くで見れるよ！

大輔 だな。

花 べったーん。いっちばーん。

花、ひいたシートの上に寝転がる。

大輔 子供かお前は。

大輔、シートの上に座る。

花 どう、浴衣？

大輔 どうも何も去年と同じだろ？

花 中身が変わってるでしょ！ 中身が！

大輔 中身、ねえ。

大輔、花の体を眺める。

花 あ、今えっちなこと考えたでしょ？

大輔 考えてねえよ！

花 嘘だー。やらしい顔してたよ。

大輔 変わってねえなと思ってただけだよ。

花 ……大輔は変わったよね。

大輔 そうかあ？

花 背、伸びたんじゃない？

大輔 ああ、そうかも。

花 どのくらい伸びたか見てあげるよ。

大輔 は？

花 ほら立って。

大輔 どうやってはかんだよ。

大輔、しぶしぶ立つ。

花、大輔の正面に立つ。

大輔 何だよ。

花 私で測るの。

大輔 は？

花、大輔に顔を近づけ手で身長を測る動作をする。

大輔　こんなんでもわかんのかよ。

花　じつとしてて！

大輔　じつとしてようにも……近くね？

花　キスの距離だね。

大輔　ば、バカっ！

大輔、仰け反る。

花　もー。動かないでって言ったのに。

大輔　花が変なこと言うからだろ？

花　3センチだね。

大輔　え？

花　去年より3センチ伸びてると見た！

大輔　絶対適当だろそれー。

花　当たってると思うけどなあ。

大輔　……花ってさ、いつも明るいよな。

花　大輔も明るいじゃん！

大輔　無理してない？

花　してないよー。私ね、おばあちゃんに言われたの。もう死んじゃったんだけどね。「人間いつも楽しそうにすれば、楽しいことがやってくる。」って。逆に、「楽しそうにしないと、楽しいことが逃げてくぞ。」って。だから私は今のこの楽しい時間がなくならないように、今をめーいっぱい楽しむの！

大輔　いい！　いいおばあちゃん！　いい心がけ！　俺も見習おう！

花　見習って見習って！　尊敬して尊敬して！　崇め奉って！

大輔　お前は神か！

花　神さまより天使がいーなー。……あ、みんなこっちこっちー！

花が手を振る。

一平、香織、義樹が現れる。

義樹はお菓子や飲み物が入ったビニール袋を抱えている。

一平 おお、なかなかいい場所とれたじゃん。

花 でしょー？

大輔 割と時間かったな。

義樹 買い物はスムーズにいったんだけど途中でホームレスのおっさんに絡まれちゃってさ。

香織 怖かったー。

一平 まじゲロくさかったわ。ああはなりたくないもんだね。

義樹 気をとりなおして乾杯といきますか。

大輔 あれー。お酒ないじゃん。

一平 今日は無理だな。花火大会だってんで年確強化してるみたいなんだよ。
花 それは残念。

大輔 よし！ ここは俺に任せろ。

香織 老け顔だから年確すり抜けられるってこと？

大輔 ちげーよ！ 家から酒持ってくる。

義樹 おお！ 大ちゃんち酒あるの？

大輔 ある！ 冷蔵庫に結構入ってたはず！ 親父もお袋もアル中だからな。
常備されてるぜ。

花 おお！

一平 さすが！ 花火までまだ時間あるし、持ってこよう！

大輔 ただ俺1人じゃ持ちきれないから誰か手伝ってくれよ。

香織 じゃあじゃんけんで負けた2人が大輔んちで勝った2人が場所取りね。

大輔 おい！ それじゃあ俺と一緒に行くのがみんな嫌みたいじゃんか！
逆にしてください！

義樹 細かいなあ。

花 じゃあ勝った2人が大輔んちね。

大輔以外の4人でじゃんけん。

結果、義樹と香織が勝つ。

義樹 よっしゃー勝ったぞー！

花 負けちゃったー。

香織 勝っても荷物持ちでしょ？ 喜べないし。

一平 つーか義樹また荷物持ちじゃん！

義樹 さっきは負けて荷物持ちで今度は勝って荷物持ちかよー。

大輔 お前、荷物持ちの才能あるよ。

義樹 いらないわそんな才能！

花 じゃあ一平と待ってるねー。

一平 いつてらっしゃーい。途中でつかまんなよ。

香織 捕まったら本当洒落になんないわ！

大輔 じゃあちよつと行ってくるわー。

大輔、義樹、香織、去る。

花 ねえ一平。

一平 んー？

花 ごめんね、この間の試合。

一平 ま、しょーがないわな。

花 私のせいで。

一平 気にすんなって！ 俺は後悔してないよ。

花 でも……。

一平 いいか、お前が事故りそうになったのもお前のせいじゃないし、俺がそれをかばって怪我したのもお前のせいじゃない。むしろ俺は嬉しいんだけ。

花 嬉しい？

一平 お前が助かってさ。

花 ……ごめんね、ありがとう。

一平 その話はもうおしまい！ せつかくの花火大会なんだからもつと明るい話しよーぜ。

花 うん。

間。

花 ……ピクニックに行きたいね！

一平 は？ どうした急に？

花 うん！ みんなでピクニックに行こう！

一平 それはいいけど、なんで急にピクニック？

花 こうやってブルーシート広げてなんかするのって楽しいじゃん！

一平 確かに。

花 だから今度はピクニックにしよう！

一平 お前弁当とかつくれるの？

花 サッカー部マネージャーの腕、とくにご覧あれ！

一平 そっか。そりゃ楽しみにしてるよ。

花 はちみつレモンならお手のものさ。

一平 いやそれピクニックで食わないし。

花 スポドリ！

一平 いるかもしれないけどそれ弁当じゃないし。

花 たこさんウィンナー！

一平 ……と？

花 カニさんウィンナー！

一平 ウィンナーのみかよ！

花火の音。

花 あれ？ もう始まるの？

一平 いや、まだ開始まで時間あるけど……。

花 試しうちな。

一平 かもね。

花 花火あるあるだね。

一平 あるある？

花 開始時間前に一発花火が鳴って、「あれ？ もう始まるの？」的な会話を
する。

一平 確かに。その会話よくするわ。

花 はい。次一平の番！

一平 は？

花 花火あるあるのいいこだよ！ はい！

一平 花火あるあるー？ そんな急に言われても……。

花 甚平着てる女子は大体金髪。

一平 確かにそんな気するけども。

花 女子トイレの異常な混雑。男子に生まれたかったと思う瞬間。

一平 確かに並んでるの見て女子大変だなーって思うけど！

花 (ジェスチャーをしながら) ピュー！ボカーン！ 花火あがる。男の子「キレイだね」女の子「そうだね」「いや、花火じゃなくて君のことだよ」

「え？」ポツ。チュー！

一平 あるある……。あるのかそれ？

花 去年3組見つけたよ。

一平 まじでか。

花 やってみて？

一平 やんねーよ。

花 一平は好きな人いないの？

一平 いねーよ。

花 香織のことは？

一平 は？ なんで香織が出てくるんだよ。

花 中学から一緒でしょ？

一平 それ言ったら大輔は小学校から一緒だろ。

花 そっか。……なんかいーなーずっと一緒で。

一平 別にたまたま一緒だっただけだよ。

花 今はこーやって、5人で楽しくいられるけど、それは全然当たり前のことじゃなくて。高校卒業したらみんなバラバラになって、会わなくなっていくっちゃうのかなー。

義樹 そんなことないでしょー。

大輔、義樹、香織戻ってくる。義樹また荷物を全て持っている。

一平 お前また負けたのかよ。

大輔 いや、勝ったんだよ。

義樹 自分の才能が恐ろしい。

香織 筋トレ筋トレ！

花 義樹、今私たちの話聞いてたの？

義樹 最後だけ……。ね！ 卒業したって会えばいいんだよ。家が遠いわけじゃないんだからいつでも会えるって！ 我等友情永久不滅也！
一平 なんだそりや、だっさ！

義樹 えー青春っぽくない？ 我等友情永久不滅也！ 全部漢字で書くの！
大輔 いいじゃん！ 永久不滅！ 我等友情永久不滅也！ たーまやー！
香織 酔ってんの？
大輔 まだ飲んでねーよ！

花 そうだね。永久不滅！ 我等友情永久不滅也！ たーまやー！
義樹 だからまだ始まってないって！ 恥ずかしいから！ みんな見てるから！

花 たーまやー！

大輔 たーまやー！

香織 たーまやー！

一平 香織まで。

直後、花火が上がる。

義樹 あ、本当に上がった。

全員 たーまやー！

次々と花火の音。黙って花火を見つめる5人。

6 「男は一生、初恋の影を追う」

駅前。

ブルーシートを広げて雑誌と自分の絵を売る小林。

そこへスーツを着た山岡が現れる。

山岡 おお、コバさん。この時間ならここにいると思ったよ。

小林 俺たちの生活は、サラリーマン以上に毎日同じことの繰り返しだからな。どうしたヤマさん、スーツなんか着て。

山岡 色々、もうそれは本当に色々考えたんだがな。やっぱり泉ちゃんたちと協力してもらってちゃんと働くことにしたんだ。狭いけど寮にも入れた。

小林 そうか、そりゃよかった。

山岡 なあコバさん、コバさんも意地はってねえでさ。

小林 悪いな。もう二度と、社会に戻る気は無いんだ。俺の時間はここで止

まり続けてる。

山岡 お前に過去何があったかは知らないけどよ、そこまで言うなら無理には言わない。ただよ、なんとか場所だけかえれないのか？

小林 そんな簡単に引越せるもんじゃないことはヤマさんならわかるだろ？

山岡 わかってるつもりだ。でも役所の強制撤去には逆らいようがねえ。保護を受ける気がないんだったら場所を変えなきゃやっていけん。しかも聞いた話じゃ強制撤去にかかる費用を立ち退かないホームレスに請求するらしいぞ。

小林 そんなもん払えるもんか。

山岡 悪いこと言わねえ。場所だけ変えてくれよ。コバさんが強制撤去される姿なんて見たくねえよ。

小林 ……心配かけてすまないな。忠告ありがとう。考えとくよ。

山岡 未来に幸あることを祈ってるよ。

小林 ああ。

山岡 どうだ？絵の売れ行きは？

小林 さっぱりだな。

山岡 どれ、別れの挨拶代わりに一枚買わせてくれよ。

小林 ヤマさんから金は取れねえよ。

山岡 そうか……。じゃあこの名刺を渡しとくよ。

山岡、名刺を小林に渡す。

山岡 解体屋の事務方になったんだ。まあなんか困ったことがあったらいつでも連絡してくれ。

小林 ああ、すまないな。さあどれでも好きなの持っていきな。

山岡 うん。どれにしようかな。……おお、これはこの間の花火のやつだな。

小林 ああ。

山岡 お、珍しく人間描いてやがるじゃねえか。誰だこりや？

小林 俺の、初恋の人だ。

山岡 泉ちゃんか？

小林 なんでそうなる！

山岡 よく思い出ただけでこうも描けるもんだ。

小林 ほら、よく言うだろ？ 現実的な女と違って、男はロマンスだから、いつまでも初恋の人を想い、その面影を追いかけている動物だってな。

山岡、笑う。

山岡 確かにな。死んだ女房のことより学生時代の初恋の子の顔の方が鮮明に思い出せらあ。よしっ！ これ、もらってくぜ。

小林 毎度あり！

山岡、去る。

小林、ゆつくりとタバコを吸い始める。

そこへ千葉と泉が現れる。

小林 いい加減にしてくれないか。

千葉 すいませんね。

小林 そう思うなら、もう来ないでほしいが。

泉 ちょっと今日はいつもとは用件が違うんですよ。

千葉 老婆心というやつです。

小林 ……なんだ？

千葉 せめてお引越しされませんか？

泉 強制撤去に合えばコバさんも今の生活は続けられません。

千葉 来週には直接僕らの上司が出てきます。

泉 そうなったら私たちも庇いきれません。

小林 ……お前たちがヤマさんにその話を吹き込んだんだな。

千葉 え？

小林 さっきヤマさんが来たよ。俺に引越せってな。お前たちの差し金か。

泉 ……差し金だなんて。そんなつもりは。

千葉 コバさん、あんたうちの上司から犯罪者じゃないかって疑われてんですよ。

小林 何？

千葉 あなたもこの辺長いから知ってますよね？ 昔この辺りのブルーシー

トハウスで「置屋」を開いてやがった連中がいることを。

小林 噂くらいはな。

泉 毎日酒池肉林の大騒ぎで大変だったらしいですよ。

千葉 私も実際に見たわけではないですが、ヤクをキメて遊んでたとか。

小林 ……どうのことだ？

千葉 うちの上司はあなたがヤクを大量に保持してるんじゃないかと疑ってるんです。

小林 バカ言え。

泉 私もそう思います。こうやって会えばすぐわかることなのに。

千葉 残念ながら私達の上司はあなた方の人間性まで見ない。

泉 それに、知ってますか？ その「置屋」絡みの連中、ある時を境にぱったりといなくなったんです。なんか怖くないですか？

小林 そんな連中、消えてくれた方がありがたいじゃないか。

泉 でも、ぱったりですよ！ 何か危ない感じがします。だから今日は、逃げてくださいと言いに来たんです。

小林 ……とんだ職務怠慢だな。

千葉 とっさの現場判断です。

小林 ヤマさんはあんたらを信じて正解だったのかもな。

泉 ……コバさんも、私達を信じてください！

小林 ……。

千葉 コバさん！

小林 ……。いつもの。

泉 いつもの？

小林 ……あのパンフレットをくれよ。

千葉 あ、…はい！

泉、パンフレットを渡す。

小林 ……悪いな。

小林、パンフレットを受け取りビリビリに破く。

千葉 え？

泉 ちょっと何してるんですか！

小林 あんたらのことは嫌いじゃないが、こればかりは譲れない。こんな

俺に恥も外聞もあつたもんじゃないが、この埃まみれの体の奥からにじみ出る、クソみたいなプライドだけは捨てらんないんだよ。

小林、売り物を片付けだす。

小林 もう店じまいだ。お引き取り願おうか。

泉 くっさいですね。

小林 あ？

泉 ……くっさい体でくっさいセリフを吐きますね！あなたはそうやってゲロだけ吐いてるのがお似合いですよ！失礼します！

千葉 おい泉！

泉、去る。追いかける千葉。

千葉 コバさん。埃は洗えば落ちますから！　せめて引越だけでも考えといてください！

小林、黙々と片付けを続ける。

千葉と泉にスポット。

泉 どう思います？　コバさんが誘拐犯だなんて。

千葉 信じられないが、少女と一緒にいたって目撃情報があるからな……。

泉 このブルーシート街のどこかに監禁してらるって噂ですけど……。

千葉 まあ、そんな場所があるとして、今のところコバさんがそこに行ってる気配はないし、俺たちは警察じゃないし、24時間張り込む必要もないし。

泉 まあ、そうですね。

千葉 俺たちはその「人柄」を見るしかないだろ。

泉 はい。

千葉、泉、去る。明転。

7 「彼女は天使だったんだ」

高校時代。

ピクニックの風景。

バドミントンをする大輔、義樹、花。

それをブルーシートの上で見守る一平と香織。

一平 いーなー。俺もミントンしてえな。

香織 無茶言わないの。まだ怪我完治してないんだから。

一平 ま、そりゃそーだ。

バドミントンをしながら消えていく3人。

香織 行っちゃった。

一平 楽しそうだなー、いーなー。

香織 お弁当、まだ残ってるよ。

一平 ああ、そうだな。つーか…お前、結構料理うまいのな。

香織 ……まあ、弟につくってあげたりしてるからね。

一平 意外と女子力高いのな。

香織 意外とは余計だバカ。私はしっかり、ちゃんと花と同じく性別女子で

すから！

一平 あ、ああ。悪い悪い。

香織 羨ましい？

一平 何が？

香織 大輔が。

一平 大輔？ なんでだよ。

香織 辛い？ 花と大輔が楽しそうにしてるの。

一平 べつにー。

香織 一平は怪我までして花を救ったのにね。残念でしたー。……花は大輔のことが好きなんだよ。

一平 なんだよ急に。

香織 好きなんですよ。花のこと。

一平 は？

香織 まるわかりだよ。

一平 俺なんも言っただけだよ。

香織 もし。もしさ……事故に遭いそうだったのが私だったら一平は大好きなサッカーを捨ててまで私を助けてくれたかな。

一平 ……やめろよそんな質問。

香織 天使だもんね、花は。

一平 ……話を勝手に進めんなよ。

香織 勝てるところが一つも見つかんないよ。

一平 これがあんじゃん。(弁当をさしながら)

香織 え？

一平 花のやつマジでウィンナーだらけの弁当作ってきたからな。マジ笑ったわ。

香織 バーカ！

一平 なんだよ。

香織 ……高校卒業してもさ、私達是一緒だよな？

一平 そりゃ香織と俺は同じ大学だからな。

香織 そういうことじゃないわバーカ！

そこへ3人が戻ってくる。花はブルーシートを抱えている。

花 ねえねえ！ 秘密基地作ろうよ！

香織 え？

一平 秘密基地？

義樹 言い出したらきかないんだよ。

大輔 ほら、小学生の頃とかに作るじゃん。あれだよ。

一平 高校生にもなって秘密基地、ねえ。

花 いやいや！ 高校生にもなるとかそーゆー考え方はノンノン！ 作ってみたら楽しいと思うんだよ！ 童心忘るるべからず！

一平 初心な。

花 どっちでもいいの！ 子供でいたいーずっと子じゃラッキー！ だよ。

大輔 ……でも言われてみると楽しそうじゃね？

香織 ちよつとね。

義樹 なんかガキの頃よりすげー完成度高いのできそうだよな。

花 つくろうつくろう！

義樹 近くにスーパ―あるからダンボールもいっぱい手に入るぜ。

一平 そしたらついでにガムテとカッター買ってこいよ。

花 あーれれー？ 一平さん乗り気じゃないですかー？

大輔 がつつりちゃんとしたの作る気じゃんか。

香織 乗せられやすいね。

一平 うるせーよ！よし……やってみつか。

全員 おう！

疾走感のある音楽がかかり、秘密基地制作。

舞台上を行ったり来たり、ダンボールやブルーシートを持ってきては

重ねる。「そっち持って」「追加持ってきたよー」「それこっちじゃね？」

等声を掛け合いながら積んでいく。

花がペンキと旗を持ってくる。

花 ねえねえチームの旗を作ろうよー！

口ぐちに賛同の声。

思い思いにブルーシート上をカラフルに彩っていく5人。

義樹 大ちゃん意外と絵えうまいね。

大輔 花下手すぎー！

香織 絵心ないわー。

花 そうだ！ あれ書こう！

一平 あれ？

花、ブルーシートに大きく「我等友情永久不滅也！」

一平 だっさ！

義樹 いいじゃん！ いいじゃん！ これぞ青春！

5人完成したブルーシートを広げる。

全員 できたー！

大輔 結構楽しかったな。

花 でしょー？

義樹 いやぁこれ完成度高くね？ 俺ここに住めるわ！

香織 完成度高いけど、ここに住んだら完全にホームレスだから！

一平 確かに！ よく川沿いでこんなん見るわー！

花 ちっがーう！ これは秘密基地なの！

笑う5人。

花 そしてそしてこれでーす！

花、缶を持ってくる。

大輔 缶？

義樹 ってことは。

香織 タイムカプセルをやろうってわけね！

花 ピンポーン！

一平 10年後の自分へってやつだな。

義樹 すげー！ ドラマみたい！

大輔 やろうやろう！

香織 はいっ！ 紙とペン！

香織、みんなに紙とペンを配る。

義樹 何描こうかな。俺は何になってっかな。

香織 結婚してるかなー。

大輔 なりたいものかー。

一平 絶対見んなよ！

花 そうだよ！ 10年後にみんなで見るとだよー。それまで秘密なんだから！

義樹 ここなら10年後も残ってそうだしな。

それぞれ紙をたたんで缶に入れる。

花　じゃあ、埋めるよ！

暗転。学校のチャイムの音。

8「あの日、彼女は来なかった」

再び、大学時代。

タイムカプセルを探す4人。

一平　この辺だっけなー。

大輔　簡単に見つかると思ったんだけどなー。

香織　衝動的に来ちゃったけど、こんなところに花の居場所のヒントがあるの？

義樹　あるかも知れないじゃん！　ここが5人が揃った最後の場所なんだから。

大輔　行方不明になってもう4年。今更見つかると思うか？

一平　警察だって見つけられなかったんだぞ？

義樹　でもさ、やってみる価値はあるでしょ？　そう思ったからみんなもここに来たわけだし。

一平　……。

大輔　……。

香織　どうしたの？　一平も大輔も黙っちゃって。

一平　この場所は。

義樹　うん。

大輔　おい一平！

一平　いいじゃんか。昔のことだ。

香織　なんかあったの？

一平　この場所は、5人にとっての最後の場所だけど、3人にとっての最後の場所でもあるんだ。

義樹　3人？

香織　あの後。大輔と一平はここで花と会ったの？

一平 ああ。会った。

明転。

高校時代。

秘密基地にて花と一平。

一平 悪いな。急に呼び出して。

花 ううん。

一平 転校なんて、なんでもっと早く言ってくれなかつたんだよ！

花 ごめんね。言い出しにくくて……。

一平 俺は、まだ、お前と一緒にいられると思ってたんだぞ。

花 うん。

一平 だから、タイムカプセルなんて、秘密基地なんて言い出したんだな。

花 ……うん。最後に何かやりたかったんだ。それに一生会えなくなるって

わけじゃないし。だから、約束、しておきたかったんだ。10年後もここで会おうねって。

一平 俺は……。俺は好きだったんだぞ！ お前のことが！

花 ……。

一平 これからもずっと一緒だと思ってた！ 一緒に居られるだけでいいって！ 告白しなかったんだ。……5人の関係が崩れるのはもっと嫌だったから。……でも、そーゆーことだったら話は別だ。俺は花のことが好きだ。

遠距離でも構わない。ママに連絡する！ 会える時は必ず会いに行く。…

…だから俺と付き合ってくれ！

花 一平……。

間。

そこへ息を切らした大輔が走ってくる。

一平 大輔……。

花 どうして？

大輔 たまたまこっちにむかつていく花を見たんだよ！

大輔、一平を殴る。

花　ちよつと！

一平　……。

大輔　抜け駆けすんなよ！　約束したじゃんかよ！　お互いにこの気持ちは、胸の内に秘めとこうって！　約束したじゃんかよ！

一平　……悪い。抑えらんなかった。

大輔　抑えらんなかったじゃねえよ！　バカ。

花　大輔……。

大輔　ごめん花。お別れだつてのにこんな醜い争いを見せちまつて。

花　うんうん。

大輔　……もうわかっちゃったとは思うけど、俺は花が好きだ！　ずっと好きだった！

花　……うん。

大輔　ごめん。最後に花を困らせるようなこととして……。

花　……うんうん。2人ともありがとう。私、すっごく嬉しいよ。幸せ者だなー私は。でも、ごめん2人とも。ちよつと、ね。びっくりしちやつて……。私、今、なんて言ったらいいかわかんないの。

一平　……。

大輔　……ごめん。今日会ったことは忘れてくれ。

花　……ダメだよ。ちよつと今はびっくりしてうまいこと言えないけど。……思い出をなかったことになんかしちやダメだよ。「今日」があった。だから「明日」が来るんだから。……私も、ちゃんと答えるよ。少しでも、少しでも、ね。落ち着いて考えさせて。「明日」。「明日」またここで2人にちゃんと、返事するから。ちよつとだけ、待っててね……。

大輔　……うん。

一平　ああ。

花　……。

花、去る。

明転。

大輔・一平　だけど「明日」は来なかった。あの日、花は現れなかったんだ。

再び、大学時代の秘密基地へ。

義樹 そんなことが。

香織 ……そんな大事な事。なんでもっと早く言ってくんなかったの？

一平 ……恥ずかしいだろ、こんな話。

香織 でも！

大輔 ほら、「我等友情永久不滅也！」だろ？

義樹 ……花は、何て返事するつもりだったんだらう。

大輔 わかんねえよ。そこから花は行方知れず、返事も聞けずじまいだよ。

香織 花のやつ、相談くらいしてくれてもいいのに……。

一平 だから、俺たち3人だけの秘密にするつもりだったんだろ？

義樹 そうだね。聞いちゃったら今まで通りにはいられないもんね。

大輔 ほらっ。タイムカプセル探すんだろ？

義樹 う、うん。

香織 そうだね。

黙々と探し続ける4人。

義樹が缶を見つける。

義樹 あったー！ これだあ！

香織 あーそれぞれ！ 懐かしい！

一平 きったねえ缶だな。

大輔 花のやつ、どっから缶持ってきたんだらうな。

一平 じゃあ、開けてくれよ。

義樹 ……うん。……なんか緊張するね。

義樹、缶を開ける。

義樹 うわー。入ってるよ！

一平 そりゃ入ってるだろ。

大輔 自分の読んでこうぜ。

香織 じゃあ、出すよ。

香織、紙を1枚ずつ取り出す。

香織 はい、義樹、一平、大輔、私、……花のは私が読むね。

全員止まる。

義樹 ……は、恥ずかしいんだけど。何書いたか覚えてないし。

大輔 みんなそうだよ。

一平 というわけで義樹から。

香織 3、2、1はい。

義樹 まじか。

義樹、紙を開く。

義樹 「監督！ 今映画何本目っすか？」だって。

一平 すげーなお前！

大輔 夢に近づいてんじゃん。

義樹 いやいや、後6年じゃ監督にはなれないって。

香織 あの頃は10年の感覚が違ってたからね。

義樹 はいっ！ 次香織！

香織 私自分で書いたの、覚えてるよ。

一平 覚えてんのかよ！

香織 ほら「幸せな結婚生活送ってますか？」だってさ。

一平 女優じゃないのかよ。

香織 この頃はそんな風には考えてなかったの！

義樹 まあ後6年で結婚はできるかもね。

香織 今となってはもう少し先でもいいけどね。はいっ！ 次一平！

一平 ……なんてかいたかな。やっぱサッカー選手かな？ あ……。 (苦笑)

義樹 何なに？

大輔 やっぱりサッカー選手？

一平 ……「けががなおす！」だって！ 俺バカじゃん！

大輔 10年後に向けての話じゃねえ！

香織 それだけ当時、怪我を治したかったってことね。

義樹 一平らしいと言えば、らしいな。

一平 結局、完治できなかったけどな。はいっ！ 大輔の番！

大輔 ……俺か。あ……。

一平 どうした？

大輔 俺のは、やめとこうぜ？

香織 えー！ それはずるいでしょ！

一平 おい、義樹！

義樹 ああ！

義樹、大輔を取り押さえる。

大輔 やめろよ！ やめろって！

義樹 今だ！

一平、大輔から紙を奪う。

一平 ご愁傷様。さーて何て書いたのかなー。（紙を開いて）「画家になって
ますか？」

間。

一平 え？ お前画家になりたかったの？

義樹 それって昨日言わなかったやつじゃない？

香織 確かに絵はうまかった気がするけど。へえ、知らなかった。

大輔 うわああああああ！ 恥かしっ！ 俺のバカ！ だつれにも言った
ことなかったのに！ 10年後ならいいと思ったのか俺！

一平 タイミングとしては最高のタイミングで開けたな。

大輔 うるせーよ！

香織 いいじゃん！ 画家！ まだ間に合うよ！ 仕事しながら目指しな
よ！

義樹 そうそう！ 大ちゃんならなれるって！

大輔 いやその励ましマジで恥ずいからやめて！

間。

義樹 よしっ！ 大輔のなりたかったこともわかったわけだし。あとは……。

一平 ……じゃあ香織、頼む。

香織 うん……。

香織、泣き出す。

一平 おい。

香織 ……ごめん。ちょっと、うん。（涙を拭って）花、「10年後のみんな。会えてよかったね。」だって。

間。

一平 馬鹿野郎。お前がいねえじゃんか。5人、揃わねえじゃねえか……。

大輔 花……。

義樹 花らしいよね。俺たち、みんな自分のこと書いてつけど、あいっだけ、5人のこと書いてるよ。

大輔 花ー！ どこにいるんだよ！ 花ー！

大輔、「花ー！」と叫びながら舞台上を駆け回る。

大輔 つくそお！ 花ー！ 花ー！ 返事しろよお！ 花ああ！

香織 大輔……。

義樹 ごめん、結局、ヒントなんてなかったね。期待させてすまなかった。

間。

一平 おい香織！ その紙の裏！

香織 え？

一平 なんか書いてある！

大輔 花！

香織 え？ 嘘。なにこれ！

義樹 おいつ！　なんて書いてあるんだ？

香織 「みんなごめん。青に閉じこめられた。約束守れそうにない」

大輔 ……おいつ！貸せ！

香織 え、うん。

大輔、香織から紙を奪う。

大輔 ……インクが、新しい。専門家じゃないからわかんないけど、確実に4年前のものじゃない！　4年前に書いたやつと明らかに劣化具合が違う！

義樹、一平、手紙を覗き込む。

義樹 ……ほんとだ。

一平 つてことは……。

全員 花は生きてる！

香織 ……でもこの文章。

一平 あのカ、遺書のつもりじゃないだろうなあ！

義樹 探そう！

香織 でもどこを？

大輔 「青に閉じ込められた」なんて紛らわしい表現しやがって！

一平 あいつ自身見つけて欲しい気持ちとそうじゃない気持ちがあるってことか？

大輔 片っ端から探してやるよ！　青いとこだろ？

義樹 ブルーシートだよ！　ブルーシートに閉じ込められたんだ！

香織 ブルーシート！　川沿いのホームレス街！　花火の時、絡まれた！

一平 それだ！

大輔 まだ間に合う！　まだ間に合うはずだ！　探すぞみんな！

他3人　おう！

9 「そして彼女は永遠になった」

音楽がかかり、手分けして舞台上のブルーシートを探し回る4人。

そこに千葉と泉が走ってくる。

泉　いません！

千葉　どこに行ったんだコバさん！

泉　……引越したんじゃないですよ？

千葉　そんなはずはない！　コバさんはあそこを動くはずがない！

泉　じゃあ！

千葉　向かったんだ！　例の場所へ！

泉　探しましょう！　ブルーシート全部ひっぺ返して！

舞台上を駆ける小林。

泉　今のは！

千葉　追うぞ！　泉！　あの人にも連絡を！

泉　はいっ！

舞台上を駆け回る4人と泉、千葉、小林。

次第に舞台上は一平と大輔のみに。

音楽のピークで舞台上手からは大輔。

舞台下手からは一平が現れる。

2人とも息を切らしている。

大輔・一平　花！

舞台中央から花の声。

花　待ってたよ！

大輔　花！　花！　どこにいるんだよ！　花！

大輔、膝をつく。静止。

照明は舞台下手のみに。

一平　花……。

花、舞台正面から出てくる。

花、その場で倒れる。

一平、花を抱きかかえて舞台正面から去っていく。代わりにそこから小林が出てくる。全体に照明。大輔、息を切らしながら。

小林
⋮
○

小林
⋮
○。

そこへ、泉と千葉、香織、義樹が現れる。

泉 義樹さんと香織さん連れてきましたよ！

香織 本当に一平なの？

小林……6年ぶりだな、大輔、みんな。

小林
……どうしてここが？

小林 …… ああ、そうか。お前、役所勤めだったもんな。もう後輩のできる歳になったのか。ずいぶん経ったもんだ。

小林 俺もアホだな……。道理で毎日のように来るわけだ。

大輔 あの日……。お前は行方不明になった。結局花は見つからなかったばかりか、一平まで行方不明になっちまったんだ。俺たちは、そりや落胆したさ……。特に香織の落胆ぶりは見ていられなかった。でも……お前、あの日、花を見つけてたんだろ？

小林 ……ああ。見つけたよ。

義樹 見つけたのか！

香織 どこ？

大輔 どこだ！ 花はどこにいるんだ！

小林 ……ここだよ！

小林、舞台背面のブルーシートを剥がす。

ブルーシートの後ろには「我等友情永久不滅也！」の旗と花の死体。

千葉 うっ……。

大輔・義樹・香織 花！

泉 死んで……ますよね。

大輔 あ頃の……ままだ。

千葉 おかしいですよ。6年も経ってるんですよ。何で腐ってないんですか？

小林 防腐処理を施してるからな。

千葉 それにしたって……綺麗すぎる。

泉 聞いたことがあります。神の加護を受けた死体は何年経っても腐らないって……。

千葉 そんなバカな……。

大輔 花……。

小林 ……6年前、俺は首を吊って自殺した花の死体を見つけた。信じられなかった。……いや、信じたくなかった。あの日、俺たちは花が生きているという希望に満ち溢れていた。そんなお前たちに残酷な現実を突きつけられるはずがない。俺は、あの日決めたんだ。俺はここで花と青春の……青の日々を生き続けようとな。そのためだったら戸籍を捨てることも、顔を変えることも苦じゃなかった。

義樹 戸籍を捨てたのか……。

香織 その顔は……整形なのね。

小林 そう、だから俺はもう小林一平じゃない。ただの「コバさん」さ。

大輔 いや、お前は「一平」だ。俺の、俺たちの親友の「一平」だよ。

小林 もはや鏡を見ても俺は俺がわかんねえってのに……。

義樹 お前が一平じゃないってなら！ だったらなんでその旗をここへ持ってきた！ あの秘密基地から旗がなくなってる俺たちが気付かないと思ったか？

小林 ……今年は10年後だからなあ。もしかしたらって思ったのかもな。

香織 10年後……。タイムカプセルの約束。

大輔 花は……。花はどうして自殺なんか……。

小林 これを……。

小林、2枚組の手紙を渡す。

千葉 それは……。

小林 自殺した理由は一枚目に書いてある。理由と俺たち4人への感謝と謝罪だ。

大輔、手紙を読む。

大輔 ……そんな。

香織 なんて、なんて書いてあるの？

小林 花は転校する前に……。俺たちの告白の次の日に、親に売られたんだ。

そしてブルーシートの置屋で薬をやらされ、性奴隷のように扱われ、精神は衰弱し、自殺に至った。親は娘を売った事実を話さなかったし、捜査にも非協力的で、すぐに捜査を打ち切らせた。…想像もしたくない。あいつが何をしたってんだ！ 青に閉じ込められた日から。あいつにとってそれこそ、この世界は地獄の毎日だっただろう。……だからせめて死後は天国に行って欲しいと！ この地獄を壊して、あの時を、あの頃を、この場所を、守り続けると誓ったんだ！

大輔 ……。お前が俺でも、花を見つけたのが俺でも、多分、きっと、お前と同じことをしたかもしれない……。

千葉 大輔さん……。

小林 お前なら、俺の気持ちがあわかってもらえと思ったよ。

大輔 一平……。

小林 2枚目の手紙。

大輔 え？

小林 見てみる。

大輔 封が切られてない……。これはっ！

花に照明があたる。

花、立ち上がり、手紙を書く動作。1枚目の手紙を封筒に入れる。

花 ……ダメだ。これで終わっちゃ……。書かないと。ちゃんと。

花、もう1枚手紙を取り出す。

花 ……。思い出すんだ。あの頃の、あの頃の私として、書くんだ。ちゃんと！ 笑顔！ 私、笑顔！

花、手紙を書き出す。

花 一平と大輔へ。

大輔 俺たち宛？

小林 ああ。つまり……。

小林・大輔 あの日の返事！

小林 俺には開けられなかったよ。

大輔 ……。

小林 怖かった。フラれるのが……。 (自嘲気味に笑う) おかしいだろ？ こんな事しかしといてフラれるのが怖いなんて……。普通の男子の告白だ。

大輔 ……わかるよ。

小林 読んでくれ大輔。お前と一緒になら、今なら、聞ける。

大輔 わかった……。

大輔、封を開ける。

花、書き終わった手紙を手に持ち、立ち上がる。

花・大輔 拝啓、一平さま、大輔さま。

花 2人宛に手紙を書くなんてなんか不思議な感じがします。でも、それは私のせいじゃありません。2人が1度に告白してくるのが悪いんです。本当に最後の最後まで私の悩みの種はあなたたち2人でした。高1の春、一平が私をサッカー部のマネージャーに誘ってくれた時、本当に嬉しかったです。本当は、高校3年間ひとりぼっちじゃないかって、ずっと不安でした。でも思えばあの時から私の高校生活は、鮮やかな色を描き出したんです。初めて5人で遊びに誘ってくれたのは、大輔だったよね。私を仲間に入れてくれてありがとう。おかげさまで、部活ではあんまり喋らなかつた義樹や香織と仲良くなれました。特に香織は同じマネージャーなのに全然喋ってなくて、最初は怖いなって思ってたから、仲良くなれて本当に良かったです。マネージャー業もより楽しくなりました。大輔のおかげです。

香織 何それ……。

花 あれ？ こんな風に書くとは義樹と仲良くなれたことがどうでもいい感じになっちゃうね。いつもみんなを盛り上げてくれる義樹が大好きだよ！映画好きの義樹。いつか義樹の作った映画がみたいです。

義樹 作る。俺頑張って映画作るよ。

花 そんな義樹と仲良くなるきっかけをくれたのも大輔でした。うーん。ダメですね。書きたいことが多すぎて何を書けばいいかわかんないです。一生書いていられそうです。だから、結論を書きますね。2人とも、こんな私のことを好きになってくれてありがとう。2人とも大好きです。でも友達としての好きと恋愛としての好きは分けななきゃダメだね。私が、ずっと一緒にいたいって思うのは、恋愛として好きなのは、大好きなのは……。

大輔の動きが止まる。

小林 ……おい、大輔？

泉 大丈夫ですか大輔さん！

大輔 う、うん。悪い。続けるよ。……恋愛として好きなのは、

花・大輔 大好きなのは……小林一平くん。あなたです。

小林 花……。

花 ごめんね大輔。大輔のことも大好きなんだけど、恋愛の好きとはちよつと違ったみたいです。ない頭を振り絞って、考えた結果です。許してね。それはそうと大輔大好きってなんか面白いね。大輔大好き。

大輔 ……全然面白くねえよバカ。

花 一平は、無愛想で、自分勝手に、ちよつぴりおバカさんで、かっこつけて……でも誰よりもみんなのこと考えてて、優しく、だから大好きです。サッカーの試合でもさすがキャプテン！ 一番輝いていましたよ。グラウンドを駆ける一平の姿は、普段と別人のようにカッコ良かったです。花見、楽しかったね！ 花火、楽しかったね！ ピクニック、楽しかったね！ どの思い出もゼーんぶ鮮明に思い出せます。だけど、だから、ごめんね、約束守れなくて……。遠距離でも私たちなら絶対大丈夫！ そう信じて、そう決めてあの日眠りについたんだけど、私に「明日」は来なかったみたいです。ごめんね、怪我までして私のこと助けてくれたのに。結局無駄にしまいました。ごめんね、一平はあんなにサッカーが好きだったのに。ごめんね。

小林 ……謝んな。謝んなよ！

花 ごめんね、何の役にも立たなくて。

小林 何言ってるんだよ。

花 ごめんね、先に死んじゃって。

小林 本当だよ。

花 ありがとう。一平には、本当もらってばかりです。

小林 そんなことない。俺の方が。

花 一平には、私が死んだ後も幸せになつて欲しいです。

小林 ……花。

花 私のこと追ってきたりなんかしたらタイキックなんだからね。

小林 なんだよタイキックって…。

花 追ってきちやいやだけど、たまには私のこと思い出して欲しいな。

小林 俺の中にはお前しかいねえよ。

花 忘れないで欲しいな。

小林 忘れられるわけないだろ。

花 小林一平くん。私はあなたのことがずーつとずーつと好きです！

小林 俺もだよ。

花 あなたの幸せを祈って、天国からずーつと見守っています。だからいつ

か……いつか私よりも大好きな人を見つけてその人と2人で幸せになってください。応援しています。ありがとうございます。さようなら。……花より。

花、再びその場に倒れる。

泣く4人。

千葉 大輔さん、どうしましょう。警察を呼びましょうか。

泉 花さんの死体もこのままにはできませんしね。

大輔 ……あ、ああ。

千葉、携帯を耳に当てる。

小林 待ってくれ！

千葉 なんですか。

小林 花は生前、薬をやってた。事件性も強い。警察を呼べば花は検死解剖にかけられる。……そんなの嫌だ！ そんなことさせない！ 花を持って行かせやしない！

泉 そんなこと言っても死体遺棄は立派な犯罪ですよ！

義樹 そうだよ。気持ちにはわからなくないけど、大輔！ 警察を呼ぼう！

小林 頼む！1日だけでいい！ 1日だけ待ってくれないか！

小林、土下座する。

大輔 一平……。

千葉 土下座されましても……。

香織、小林の隣で土下座する。

香織 お願い！ もう1日だけ待ってあげて。

義樹 香織まで……。

小林 香織……。

香織 一平は6年もずっとここでこうしてきたんだ！ あと1日くらいいいでしょ？ お願い！

泉 発見される前と後じゃ状況が違いますって！

小林 そこをなんとか！

千葉 ですから……。

大輔 千葉！ 泉！

千葉・泉 はい！

大輔 責任は俺が持つ。1日だけ待ってくれないか。

千葉 本気ですか大輔さん！

泉 知りませんよ。

大輔 大丈夫だ。何があってもお前たちのことは守る。

千葉 大輔さん、そんな権限ないじゃないですかー。

大輔 なんとかするから。な、頼む。

泉 ……役所戻りますか千葉さん。

千葉 もー！ なんかあったら今度夕食おごりですからね！

大輔 ああ。悪いな。

千葉、泉去る。

小林 迷惑かけてすまない。

大輔 気にするな。

義樹 でもどうするの？

香織 何か考えがあるの？

小林 ムシヨに入る覚悟はできてる。1つ罪を増やすだけだ。

香織 罪を増やすって！ 何する気？

大輔 おい、無茶はするなよ。

小林 なーに。勝算は十分にある。大輔、悪いけどケータイ貸してくれないか。

大輔 あ、ああ。

大輔、小林にケータイを渡す。

義樹 誰にかけるの？

小林 俺の絵を買ってくれたやつにな。

小林、名刺を取り出す。

香織 絵？

大輔 泉から聞いたぞ。お前路上で絵描きみたいなことしてたらしいな。何でそんなことしてたんだ？

小林 気まぐれだよ。お前の夢を俺が代わりに叶えてやったんだ。

大輔 ……何だそりゃ。

小林、山岡に電話する。

山岡 はいもしもし山岡です。

小林 山岡っていうのか、ヤマさん。

山岡 その声……！ コバさんか！

小林 いきなりすまないな。

山岡 いいっていいって。俺に連絡してきたってことはどうした？ 困り事か？

小林 ああ、一生のお願いだ。

山岡 どうしたかしこまって。

小林 ヤマさん解体屋だろ？ 発破を貸して欲しい。

山岡 発破だと？ どうしたおい物騒だな。

小林 ウチを焼き払いたいんだ。

山岡 焼き払うだって。どうしてまたそんなことを……。あ、いや、理由は聞かねえよ。

小林 助かる。

山岡 だが、貸そうにもどうやって……。

小林 盗ませてくれ。

山岡 ああ！？

小林 ……ああ、そうだ。……うん、それだけでいい。……あとは俺がやる。……迷惑はかけないようにする。……そうだ。今からだ。……ありがとう。じゃあ後ほど。

小林、電話を切り大輔に返す。

小林 ありがとう。

大輔 お前、発破って爆弾だろ？ 何するつもりだよ。

小林 花火だよ。

義樹 花火？

小林 あいつを閉じ込めていたこのブルーシート地獄ごと花を火葬して天国に送ってやるのさ。この出来事を過去にしてやる。

大輔 一平……。

香織 あんた何言ってるの？

小林 これが最後だ。

香織 ……それで気がすむのね。

小林 ああ。

香織、小林をビンタする。

義樹 うわっ！

小林 イッテェー！

香織 変わってないね。

小林 は？ どう考えても変わってるだろ？ 顔変わってんだぞ？

香織 変わってないよ。一平は一平だね。安心した。

小林 なんだよ。

香織 私も、私も変わってないから！

小林 は？

香織 あんたが刑務所入ったって、待ってるから！ ずっと待ってるから！

小林 ……うん。

香織 ほら！ やることあんでしょ！ 行ってきな！

小林 ああ！

小林走って去る。

大輔 変わらない。変わらないよな俺たちは。

香織 なんか、心なしか花が笑ってるような気がする。

義樹 久しぶりに俺たちに会えて嬉しいのかな？

暗転。

10 「彼女は儚く、切なく、美しく散った」

発破装置の導火線に火をつけようとする小林。

大輔、香織、義樹はそれを見守る。

小林　じゃあ行くぞ！

全員　3、2、1！

導火線に火をつける小林。

大輔　たーまやー！

全員、大輔の方を見る。

義樹（涙をこらえながら）まだ、まだ始まってないって！

香織　……たーまやー！

一平　香織まで。

爆発音が響き、舞台が赤く染まる。

まるで花火で照らされたように4人も染まる。

全員　たーまやー！

大輔　……手紙！　読んだぞ！　返事おせえよ馬鹿野郎！　お前が返事くれねえからよお！　もう他に好きな女作って結婚しちゃったよ！　ざまーみろってんだ！　花！　大好き「だった」ぞー！

義樹　俺も！　大好き「だった」！

香織　私も！　大好き「だった」！

小林　花ー！　花ー！　俺とずっと一緒にいてくれてありがとう！　手紙ありがとう！　本当に俺はバカで、お前の気持ちも考えずに行動しちゃって。でも俺は、お前と一緒にいた時間、本当に幸せだった。ありがとう！　大好き「だった」！　さようなら！　さようなら！

大輔・小林・香織・義樹 さようなら！

テントの崩壊する音。

さながら花火のファイナーレのごとく音が重なる。

一平 その炎はまるで花火のように儚く、切なく、美しく散っていった。その瞬間、俺たちの青は終わって、色々混ざって黒になった。過ぎていく日々の中、今でも、夏のむせかえるような暑さの中、ふと空を見上げて、雲ひとつない真つ青な空を見ると、彼女がこちらを覗き込んでいるような、微笑みかけているような、そんな感覚に包まれる。

幕。